

リナ、今、君は笑っているかな？

それとも、泣いているかな？

いや、照れ屋な君のことだから、顔を赤らめて下を向いているかもね。

この手紙を書いている時点では、僕にはわからない。

もし、君が笑っているなら僕は嬉しい。君の心が幸福で満ちているということだから。

もし、君が泣いているとしても僕は嬉しい。君の心が感動で満ちているということだから。

顔を赤らめて下を向いているとしても僕は嬉しい。それが、僕の好きなリナだから。

北海道で生まれた君と、東京で生まれた僕。今までは別々の空気を吸い、別々のものを見て生きてきたね。僕らが同じ場所で同じ時間を共有できたのはわずか3ヵ月。そこから3年間は別の場所で、別の時間を生きてきた。

「飛行機なら、東京と北海道なんてあっという間」皆が言う。

でも、そうじゃなかった。

この3年間で振り返ってみると、僕はリナの笑顔しか思い出すことができない。

そのことを、僕は喜ぶことはできない。

リナが泣いている時、僕は手を握ってあげることもできなかったということだから。

リナが寂しい時、僕は抱き寄せてあげることもできなかったということだから。

リナが不安な時、「大丈夫だよ」の一言もかけてあげることができなかったということだから。

リナが独りの時、僕は隣にいてあげることもできなかったということだから。

離れていた3年間を取り戻すことはできない。

でも、これからの3年、5年、10年、20年を一緒にいることはできる。

これからは、同じ場所で同じ時間を過ごそう。

同じ映画を見て感動し、同じ景色を見て心癒され、同じ季節に身を寄せ合い、同じ家で語らい、同じ子供を愛し、同じ喜びで笑い、同じ哀しみに涙する。

そうやって生きていこう。

同じ道を、同じ歩幅で歩いていこう。

僕と君で、同じ人生を生きよう。

結婚しよう、リナ。